書　評

柳田芳伸著
『マルサス勤労階級論の展開——近代イングランドの社会・経済の分析を通して——』

中　澤　信　彦

I

近年における我が国のマルサス研究の隆盛には刮目すべきものがある。1991年のマルサス学会の発足は，そうした隆盛を象徴する一方で，更なる隆盛の起爆剤ともなったようである。事実，学会の発足以来，マルサスの名を表題に掲げた研究書が続々と公刊されており，会員の業績だけに限ってもすでに相当な数にのぼっている。公刊順に列挙するならば，1992年に，堂目卓生『古典派経済学の模型分析——リカードウ，マルサス，シスモンディの動学理論——』有斐閣，ウィンチ『マルサス』日本経済評論社（久保芳和・橋本比登志訳）が公刊された。1994年にはプレン『マルサスを語る』ミネルヴァ書房（溝川喜一・橋本比登志編訳）が，1996年には，久保芳和編著『スミス・マルサス研究論集』大阪経済法科大学出版部が，1997年には，中矢俊博『ケンブリッジ経済学研究——マルサス，ケインズ，スラッファ——』同文館，中西泰之『人口学と経済学——トマス・ロバート・マルサス——』日本経済評論社が公刊された。初版『人口論』刊行200周年にあたる1998年は，とりわけ多産な年であった。横山照樹『初期マルサス経済学の研究』有斐閣，大村照夫『新マルサス研究』晃洋書房，岡田實・大淵寛編『マルサス人口論の200年』大明堂，そして本書が刊行された。

II

本書は著者・柳田氏が大学院生時代より20余年にわたって継続的かつ集中的に取り組んできたマルサスとその周辺の思想家，ならびにその時代についての研究を集成したものであるが，既発表の論文を雑然と併置した論文集ではなく，その主題展開および方法の一貫性は，真の意味での「集成」の名に値する。

本書の目次は次のようになっている。

序論　本書の基本的視角
第1章　地主以外の有効需要者
第2章　マルサスの勤労階級論
第3章　マルサスの余暇論
第4章　マルサスの健康論
第5章　マルサスの租税論
第6章　後期マルサスの貿易論
第7章　J・ステュアートとマルサス
第8章　マルサスとR・ジョーンズ
第9章　H・ジョージのマルサス論

本書は大きく3つの部分に分けられるように思われる。すなわち，本書の主題および方法が概括的に提示される序論および第1章，そうした主題の変奏をマルサス自身の著作の中に各論的に訪ねた第2～6章，そうした主題の来し方と行く末を18・19世紀のイギリス経済学史に尋ねた第7～9章，以上3つの部分にである。序論および第1章が扇の要となって，後続の諸章を統轄している。

III

本書の主題と方法を，序論および第1章からの引用によって確認しておきたい。まずは序論から

の引用である。

「…大半の評者はマルサスを人口原理に立脚して賃金生存費説を唱えた低賃金論者と思い設けていた。…しかし本書ではまったく正反対に…高賃金論者でもあるという部面を全面に押し出そうとする。…マルサスは文明社会の根底に私有財産制度をしっかりとすえ，その結果現出してくる「財産の大きな不等」ではなく適度な「境遇の不等」を是認したうえで，富の累進的増進に伴って，下層階級が「一定程度の勤労と熟練」を身につけて，「勤労の生産性」を向上させ，あわせて独立，節倹，まじめ，清潔といった諸徳目をも涵養し，ついには奢侈をも含有する「愉楽の標準」を限りなく引き上げていく「勤労階級」と，怠惰で放とうな習慣からせん脱できないまま，「きわめて早期で不用心な結婚」に走ってしまい，「貧窮の標準」以下の生活に安住してしまう最下層階級とに分化していくと見通し，しかもそのさい中流階級の一端を占める勤労階級への推転をより願ってやまなかった，本書はこうした大観を基本的視座にしている。…本書では，まさに以上のような観点に立って，マルサスの全著作のあちこちに点在する勤労階級に関連する片言隻語を抄出，再構成し，かつまた管見の及ぶ範囲でその結果を当時の実相と比較照合させながら，なしうる限りマルサスの「実際政策的態度」を浮き出させようと努めた。それはもっぱらマルサスが理論よりも実際に力点をおき，「実際的科学」ないしは「実証科学」としての経済学を力説していることに論拠をおいてのことである。…本書では，実際的「社会改良家」としてのマルサスを表に出しながら，できる限り多元的にかつ精細に歴史派経済学者としてのマルサスの側面を描出することにかなりな意を注いだ」(4-7ページ)。

次いで，第1章からの引用。

「知られるように，従来のマルサスにおける有効需要者に関する定説は，マルサスを過少消費説に立脚し地主を先頭とする召使い，政治家，兵士，裁判官，弁護士，医師および僧侶の一団といった不生産的消費者による有効需要の創出を唱えた反動主義者にほかならないと位置づけてきた。筆者もこれを否定するわけではない。けれどもマルサスは第二版『経済学原理』において「社会の中流階級が大きな比率を占めていることほど有効需要にとって好都合なことはない」という注記を追加している。この言説をマルサスが初版『人口論』以降一貫して主張した中流階級肥大化論との関連において咀嚼するとき，初版『経済学原理』で使用された「地主以外の有効需要者」という語句の内容解釈にあたっては慎重であらねばならないとおもわれてくる。マルサスがいう「地主以外の有効需要者」とはどんな人々であったのか」(14-5ページ)。

「…下層階級には「勤労の習慣」を摂取できる人とできない人との両者がいる…このように理解したうえで筆者は…マルサスの中流階級肥大化論の本質を次のように規定したい。すなわち，マルサスは下層階級の「一定の熟練と勤労」を体得しえた勤労階級すなわち中流階級と，それを体得しえない最貧階級もしくは貧窮階級とへの二極分化を説き，かつ前者への上昇転化を希求していたと。…マルサスは「一定の熟練と勤労」の習得の有無を分岐点とする下層階級の「勤労階級」と「最貧階級」とへの分化を主張したと推論できる…。筆者は，本章をとおして「地主以外の有効需要者」の本体を，中流階級に，わけても下層階級から分出してくる「勤労階級」に求めようとしてきた」(同28-34ページ)。

以上のように，著者は，人口学と経済学の両方を含むマルサス社会科学体系の全体像を理解する上での鍵概念を，「勤労階級 industrious classes」

に求めている。しかし，その「勤労階級」論をマルサスの著作から理論的に再構成するにとどまらず，それをマルサスが生きたイングランド社会の実相と照らし合わせることによって，理論家としてよりも政策家としてのマルサスを浮き彫りにしよう，というのが著者の本懐である。著者は経済学史家としては驚嘆すべき量の社会経済史的研究文献を渉猟しており，その知見は膨大な脚注において存分に披露されている。「近代イングランドの社会・経済の分析を通して」という副題に象徴されているように，この徹底した社会経済史的アプローチ──ウィリアムズ（Raymond Williams）の研究を導きの糸として，言語の用法の変遷に関する社会経済史的分析にまで踏み込んでいる──こそが，もはや決して貧弱とは言えない我が国のマルサス研究文献の中で，本書を際立たせている。以下，評者の能力的限界と紙面の制約のため，第４・８・９章──著者の力量と適性が最大限に発揮された独自の業績として，評者にとってとりわけ印象深かった──に焦点を絞ってコメントしたい。

Ⅳ

本書が「ステュアートとマルサス」を正面から論じていながら，「スミスとマルサス」「リカードウとマルサス」といった古典的問題を扱っていないことに，奇異の感を抱く読者もあるかもしれない。もちろん，それらが古典的問題であるがゆえ，新たな見解を提出することの困難さ，という消極的理由も考えられよう。しかし，本書の場合，もっと積極的な理由が存しているように思われる。「マルサスの『人口論』をスミスやリカードウの著作と読み合わせるとき，マルサスの筆のみが健康問題全般に及んでいることにすぐさま気付くであろう。…マルサスは当時の健康問題にたいして広範でかつ時宜にかなった目配りを存分に払っており，この点ではスミスやリカードウを断然よせつけない」(86ページ)との指摘からうかがえるように，著者にあって，スミスやリカードウは，少なくとも政策家としては，消極的な評価しか与えられていない。すぐれて理論家であったスミスやリカードウとは対照的にすぐれて政策家であったマルサス，そうしたスミスやリカードウに対するマルサスの種差性を，著者は強く意識しているように思われる。

政策家としてのマルサスの本領は「勤労階級」の健康問題において最も端的に看取される，とのメッセージが秘められているのであろうか，第４章は本書を構成する諸章のうちで最もページ数の割かれた章となっている。その第４章の概要を引用によってたどってみるならば，

> 「その着想の大本はスミスの第６版『道徳感情論』に発しえようけれども，マルサスは初版『人口論』において幸福の構成要素について，「私は人間の正しい幸福を構成するものは何かという学問的論議にたちいるつもりはないが，ただ二つの一般に承認されている要素，つまり健康と，生活必需品および便宜品にたいする支配とを考慮するだけにする」とうたい上げた。…この公知の一文のうちの「幸福の一つの重要な要素である健康」という側面は，今日までにときとして研究者の耳目を引くことはあっても，なぜかまったくといっていいほど全面的に，かつ真正面からとりあげられてこなかったようにおもわれる。本章では，マルサスの諸著作の中に，わけても『人口論』の各版のここかしこにちりばめられている健康問題に関わる片言隻語を寄せ集め，それらを以下のような問題意識のもとに一つの整理を企てようとするものである。周知のように，マルサスは第三版『人口論』の付録の中でとりわけ「健康で有徳，かつ幸福な人口」のきわめてゆるやかな増加を切望していることを明記している。ここでは，この文言中の「健康な人口」を筆者がこれまでに考察を重ねてきた「勤労階級」の至要で不可欠な

特質として把握していくことを第一義としたい」(84-5ページ)。

「では，なにゆえにマルサスはこれほどまでに貧民における「清潔にたいする注意不足」の払拭に拘泥し，かつまた下層階級への「清潔と愉楽にたいする嗜好」や「清潔の精神」の扶植を説いてやまなかったのであろうか。…マルサスが健康を徳性ないしは道徳とたぐえて配列していることからも推測できるように，マルサスは下層階級が強健を保ち，「清潔の習慣」をしっかりと身に具えてこそ，はじめて「勤労階級」への階級的上昇をとげていく盤石の足がかりを手に入れうると見通していた」(99-100ページ)。

「マルサスが健康を徳性ないしは道徳とたぐえて配列して」おり，マルサスが健康を「下層階級が…「勤労階級」への階級的上昇をとげていく盤石の足がかり」として認識していた，という指摘はきわめて重要である。いやしくもスミスを学んだ者であれば，こうしたマルサスの認識を，「中流及び下流の地位にある人々にとっては，徳性への道と財産への道は，たいていの場合にほとんど同一である」という『道徳感情論』第6版（第1部第3篇第3章）の有名な一節の延長線上に，容易に位置づけることができるだろう。しかし，さらに視野を拡げるならば，政治思想史研究においてばかりでなく経済学史研究においても近年大きな影響力を発揮しつつあるポーコック（J. G. A. Pocock）の思想史学との関連において，位置づけることもできるだろう。

ポーコックの大著『マキャヴェリアン・モメント』（*The Machiavellian Moment: Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition, Princeton U.P., 1975*）は，《virtue 対 corruption》の二分法を基軸として――'a "Machiavellian moment" —a crisis in the relations between…virtue and corruption'（p.462）――，近世ヨーロッパにおける共和主義思想の系譜を，トンネル史として掘り起こしている。近世における virtue の語の意味内容の一大転換，すなわち，古代的野蛮（軍事精神）から近代的洗練（作法・生活様式 manners）へと転換を遂げていった過程で，かつて corruption を生み出すものとして認識されていた商業活動がむしろ近代的な新しい種類の virtue を生み出すものとして次第に正当化され，新しい学としての「ポリティカル・エコノミー」を生み出す屋台骨となった，というのが『マキャヴェリアン・モメント』の大筋である。その壮大な歴史パノラマは，18世紀末でひとまず閉じられているが，そこから19世紀思想史への展望を読みとることは，決して不可能ではないだろう。マルサスにおける「徳性としての健康」もまた，「勤労，まじめ，節倹，独立」(100ページ）等と並ぶ，商業活動が生み出した近代的な新しい種類の徳性の一つとして，把握できるように思われる。

労働者階級における徳性の涵養という問題で忘れられてはならないのが教育論であるが，スミスは，分業の進展に伴う労働者階級の徳性の喪失の問題を，『国富論』第5篇で少なくない紙面を割いて論じている。マルサスの教育論に関する先行研究にも十分に通じているはずの著者であるから，マルサスの健康論が教育論と関連づけて論じられなかったことは，少々遺憾である。

V

本書のキー・ワードは，強調するまでもなく「勤労階級」であるが，もう一つ秘められたキー・ワードが存在している。それは「愉楽の標準 standard of comfort」である。著者は第1章で「こうした階層分化はマルサスにおける生活標準の指標である「愉楽の標準」や「貧窮の標準」にも反映されていくとも考えている」(33ページ)と述べているが，こうした問題意識を受けて，第4章第3節以下では，マルサスが下層階級における「「愉楽の標準」の向上と健康保持との関係」(93ページ)をどのように理解していたかについて，当時のイ

ングランド社会の実相と照らし合わせつつ，詳細な分析が試みられている。すなわち，第4章は「マルサスの健康論」であると同時に「マルサスの「愉楽の標準」論」でもある。第4章の「むすび」で著者は「以上解説してきたようなマルサスの健康論は後代にどのように継受されていったと考えられるであろうか」(106ページ)と自問しているが，そうした問いは「マルサスの「愉楽の標準」論は後代にどのように継受されていったのか」という問いを同時に含むものであり，この問いに対する著者なりの解答が提示されているのが，第9章である。明示的ではないけれども，第4章と第9章は共鳴しあっている。

第9章は「H・ジョージのマルサス論」と題されているが，「マルサス，ジョージ，マーシャル」と題されるほうがむしろふさわしい，マーシャル研究者にとっても意義深い名品である。その概要を引用によって確認しておきたい。

> 「マルサスによって創案された「愉楽の標準」という表記法が実はジョージの『進歩と貧困』を媒介にしてトインビーやマーシャルによっても受容されていき，しかもその路程でその原義が歪曲されていき，はては似ても似つかぬ異義語に転化されていった…」(244ページ)。
>
> 「マーシャルは『経済学原理』…第二版以降においては「愉楽の標準」の語義を「愉楽の標準の上昇というのは，おそらくは低級な欲望が優勢な位置を占めているとおもわれるところの，人為的欲望のたんなる上昇といったほどの意味のものである」という具合に転化させるかたわら，「生活の標準」という造語を考案し…それまで「愉楽の標準」にもたせてきた意味内容にきわめて似通った意義を「生活の標準」に付与したのである。筆者が尽きない関心を寄せているのは，マーシャルが『経済学原理』第二版以降でこのような煩雑でかつ重要な手直しを付加したさい，彼のジョージにたいする悪感情が一つの動機として働いたのではないかという点に収縮できる。つまりジョージがマーシャルの初版『経済学原理』を「矛盾にみちあふれた不可解な書物」とあしざまに酷評を下したのを聞知するにおよんで，マーシャルのジョージにたいする気障りは心頭に達した。爾来，マーシャルは『経済学原理』においてわずかに一ヶ所を例外として，ジョージにまったく背を向け，しかもそればかりかジョージが活用した「愉楽の標準」を逆用し，ジョージからのさらなる遊離をもくろんだ。おまけにそのさい「生活の標準」を捻出し，それをそれまで「愉楽の標準」が占めてきた地位に代位させようとさえした。こう筆者は推測するのである。かりにこの推量がうがっているとするなら，「愉楽の標準」ならびに「愉楽の理論」の創始者としてのマルサスもまた，このとき，そのまきぞえをこうむってジョージとともにマーシャルによって論外へと放逐されていったということにならないだろうか」(262-3ページ)。

本章は，「マルサスとマーシャル」というテーマに関する古典的研究の一つとして，今後も参照され続けることであろう。本章に対して評者がこれ以上つけ加えるべきことはない。「まとめてもらえてありがたかった」と，正直に告白しておこう。

Ⅵ

第8章の基本的な見解は「東インド・カレッジの歴史および経済学の担当教授であったマルサス…の後任者としてのジョーンズ…の理論はマルサスの継承・発展として位置づけることができる」(210ページ)というものである。筆者自身によるパラフレーズをそのまま引用すれば，

> 「…ジョーンズは資本なかんずく補助資本の緩徐な蓄積のもとで，上流階級の家庭にみちあふれる二次的欲望が中流階級を媒介環にして下層階級の掌中にまで行き渡っていき，そ

れに呼応して自発的抑制の輪が同様に広がっていく，またこれらと並行して労働能率あるいは熟練度を高めた筋肉労働者の一群が俸給生活者階級へと転成していくと洞察したのであった。そしてその大本をたどれば，それはまがうかたなく下層階級の一部が漸次的な富増進とともに慎慮的抑制を実行に移し奢侈（品）にたいする有効需要者である勤労階級に上昇転位していくと逸早く達観していたマルサスの心眼に発見しうるのであると」(232ページ)。

一方で，著者は序論で「本書は実際的「社会改良家」としてのマルサスを表に出しながら，できる限り多元的にかつ精細に歴史派経済学者としてのマルサスの側面を描出することにかなりの意を注いだ」(6-7ページ)と述べており，他方，通説的な理解では，ジョーンズはリカードウ地代論を事実の歴史的記述によって批判した人物として知られているわけであるから，著者はマルサスとジョーンズを「歴史派経済学者」というカテゴリーによって結びつけようとした，と言ってよいだろう。著者の試みはおおむね成功しているように思われるが，問題が残されていないわけではない。マルサスは「私の現在の心配は，潮が彼〔＝リカードウ〕に対してあまりに強く逆流しているということです。ジョーンズは，それによって正しい道からそれているとさえ思います」(マルサスからヒューウェルへの手紙，1831年5月31日)と述べ，ジョーンズのリカードウ批判には同意しなかった。馬渡尚憲『経済学のメソドロジー』(日本評論社，1990年，5ページ)の簡明な整理を拝借すれば，「具体的・機能的演繹に基づくマルサスの経済学」と「具体的・歴史的記述に基づくジョーンズの経済学」との間の断絶，という問題が残されているのである。近年大きな進展を見せているマルサスの経済学方法論に関する研究の趨勢は，「歴史派経済学者マルサス」よりも，むしろマルサスをリカードウに近づけて，「理論経済学者マルサス」を強調する方向のように思われる。例えば，ウォーターマン（A.M.C. Waterman）は，「初期から晩年にわたるマルサスの全著作において，彼の思考は概して演繹的・先験的・哲学的・抽象的であって，しばしば引用される『経済学原理』の冒頭の言葉にもかかわらず，潜在的には数学的であった，つまり，リカードウの思考に酷似していた」('Malthus, Mathematics, and the Mythology of Coherence', *History of Political Economy,* 30-4, 1998, p.572）と断じている。マルサスを「歴史派経済学者」と呼称することは，マルサスとジョーンズの親近性を強調する著者の立場からすれば一貫しているが，それを強調しすぎると，マルサスとジョーンズの経済学方法論上の種差性を見失ってしまう危険がありはしないか。

Ⅶ

以上，本書の全体に言及しないわりには注文ばかりの多い，公正さを欠く書評となってしまった。著者のご寛容を乞いたい。もちろん，こうした限界は本書の意義と功績を何ら傷つけるものではない。社会経済史的アプローチからの経済学史研究が，本書を起爆剤として一段と隆盛せんことを祈念しつつ，この書評を結びたいと思う。

（昭和堂，1998年11月刊，A 5版，viii＋277＋xi ページ，3,000円）